
魔法少女リリカルなのは 騎士マジシャンK

ひろやん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 騎士マジシャンK

【Nコード】

N1102X

【作者名】

ひろやん

【あらすじ】

『皆殺し編』で殺された圭一は気がつく記憶を持ったまま魔法少女リリカルなのはの世界のミッドチルダに転生していた。新しい名前とともに第2の人生を始めた圭一は、ある日地球が97管理外世界と呼ばれ存在を知る。11歳のなった圭一は地球に旅行に出かけるが、その途中で助けを呼ぶ声とロストロギアが現れたことに気づく。そして物語は始まる。かつて守れなかった少女と同じ声を持つ少女との出会いと共に……。

序章

カケラと呼ばれる世界が星のように輝いている空間の中、一人の少女（？）が悩んでいた。

（さて、どちらのカケラを組み込もうかしら……）

少女（？）の手には二つの小さなカケラがあった。どちらも同じ『皆殺し編』と呼ばれるカケラから紡ぎだしたカケラだ。しかし同じ世界から紡ぎだしたカケラでも、二つのカケラは微妙に違っていた。完璧な物語を作り出そうとしている少女（？）にとって、僅かな違いも重要なものだった。

（そうね、こちらにしましょう）

長い間悩んで末に、少女（？）は片方のカケラを投げ捨ててもう片方を目の前のカケラに組み込んだ。そしてその出来栄に満足した少女（？）は次に組み込むべきカケラを探し始めた。

その為少女（？）は気づかなかった。投げ捨ててカケラが『ひぐらしのなく頃に』の世界から飛び出し、物語の世界の狭間を漂うことになってしまったことを。やがて一つの世界に入り込み、その世界のカケラの一つと融合してしまったことを。

その世界の物語の名前は『魔法少女リリカルなのは』と言った。
そして『皆殺し編』の記憶を持った圭一はミッドチルダに生れ落ち
た。主人公という運命を持った圭一は、やがてこの世界の主人公達
と出会い物語を紡ぐことになる。

E p i s o d e ?

止まった時間の中、迫り来る弾丸を避ける事ができず自分は死んだはずだった。大切な仲間である古手梨花を助けるために戦って、黒幕である鷹野三四の銃弾を受け仲間が助かることを願いながら死んだはずだった。そう思っていたのに目が覚めた。周りを見るとどこか知らない建物の中で、小さな子供がたくさんいた。本当は気を失っただけで、どこかに連れてこられたのだろうか。

「気がついた？」

自分の隣にいた9歳くらいの少年が声をかけてきた。

「僕の名前はムウ。ねえ君の名前は？」

「俺の名前は圭……い……」

「そうかケイ言っただね」

上手く声が出なかったために名前をケイと思われたようだった。しかし圭一にはそんなことよりも気になることがあった。

「じじはどこなんだ？」

そう言って始めて自分の体の異変に気づいた。

声が子供の声だった。自分は声変わりは終わり、男の声になっていたはずだ。撃たれたはずの胸は無事で、変わりに頭が痛かった。それに視界が低かった。9歳の少年であるムウとより低い視線であることに圭一は気づいた。最初天井が高いと思ったのは、実は自分が小さくなっていることにこの時ようやく気づいた。

「分からない、僕たち誘拐されたんだ」

混乱した圭一に対し、ムウは最初の質問に答えた。

「誘拐？」

「そう、僕達はこの後どこかに売り飛ばされるらしい」

売り飛ばされるわけには行かなかった。どうして体が縮んでしまったのか分からなかったし、何より仲間達のが心配だったからだ。

「俺はこのまま売り飛ばされる訳にはいかない」

「僕もだよ、妹が僕の帰りを待っているんだ」

「なんとか逃げ出す方法はないか」

「むずかしいね、デバイスを持った魔道士が何人かいるから」

「デバイス？魔道士？」

「ケイ、知らないの？」

デバイスというのは何かの武器だろう。しかし魔道士とは……。普通に考えれば魔法をつかう人間という事になるのだが。

「ごめん、ちょっと記憶が混乱しているんだ。いろいろと教えてくれると助かるんだが……」

「まずここはこの世界ミッドチルダ、そして首都クラナガン……」

ムウが教えてくれた話の内容は圭一の取って衝撃的なものだった。やはり自分はある時死んだ。そして別の世界に生まれ変わったのだと。おそらくここに運ばれてくる途中で頭を打って、その衝撃で前原圭一の記憶が蘇ったのだろう。

「分かったケイ？」

「あ、ありがとうムウ」

全てを失って、そしてもう一度手に入れたこの人生。どう生きればいいのかだろうか……。今分かる事はこのままだと破滅しかないということだけだった。

何とかしようとして周りを見ると、天井近くに通風孔があるのが見えた。5歳くらいの体の自分なら何とか通れそうな大きさだった。

「あそこから外に出て助けを呼んでくる。手伝ってくれないか」

「え……、分かった。待っているからね」

しかし、圭一達の考えは甘かった、部屋の外にはちゃんと見張りがいて、脱出しようとしたことがばれてしまい捕まってしまったのだ。

「こいつらどうします?」

「せっかくの売り物を傷つけるのは不味い。逃げ出そうとしたらどうなるか非殺指定で脅してやれ」

「了解」

そう言って誘拐犯の一人が持っていた杖を圭一に向けた。杖の先

に集まる光……。それが圭一が始めてみた魔法だった。しかしその光が圭一を襲うことは無かった。突然天井をぶち破って一人の女性が降り立ったからだ。

「管理局よ、あなた達を逮捕します！」

そのセリフと同時に槍を持った騎士風の男を先頭に『管理局』の部隊がなだれ込んできた。

「よかった、僕たち助かったんだよ」

安堵の息をもらすムウの隣で圭一は一人の男を見つめていた。体長らしいその男は槍を魔法を駆使して誘拐犯を次々に叩きのめしていた。そこには強さがあつた。あの半分の強さでもあればあの時自分仲間を守れたのではないか、圭一はそう思った。逮捕劇が終わり、最初に飛ぶ込んできた女性が話しかけてきた。

「恐かったでしょ、もう大丈夫だからね」

そう微笑みかけてくる女性の横を通り圭一は騎士の前に立っていた。

「どうかしたか？」

そう問いかける騎士を前にして圭一は頭を下げた。

「お願いします。俺を弟子にしてください」

この事件で保護された子供のうち一人だけ身元が分からない少年がいた。少年は事件を解決した管理局の局員に引き取られ、後に養子になる。

ケイ・グランガイツ。適正があったため古代ベルカ式を継承した、前原圭一の第2の人生の始まりだった。

E p i s o d e ?

そこは廃村だった。田畑は荒れ、家は朽ちかけていた。雛見沢、かつて前原圭一が暮らしていた村……。97管理外世界、通称地球に来ていたケイのが見た光景だった。

11歳になったケイは義父であり、師匠である男から管理局の士官学校に入ることを進められていた。そして士官学校が始まるまで時間があつたので、それを利用して地球に来ていた。もつとも師匠は何も言わずに送り出してくれたものの、母親代わりに自分の面倒を見てくれた師匠の部下の女性や、同じく師匠の部下で地球の事を教えてくれた女性は管理外界に行くことを心配して反対され。さらに後者の娘で妹分の二人の少女からは行っちゃだど泣き付かれ、何とか宥めてようやく見送って貰ったという経緯はあつたが。

それでもケイは地球に、雛見沢に来たかった。あの後仲間達がどうなったか知リたかつたし、前原圭一として帰ることは出来なくても、せめて両親の顔が見たかった。その為にケイは雛見沢を訪れた。

そして死後20年以上経った雛見沢を訪れたケイが見たものは、誰もいない滅びた村だった。最初に自分が死んだ場所に来た。そこは唯の森で自分が死んだ痕跡は当然何も無かった。

次に古手神社を訪れた。鳥居は禿げかけ、境内はあれ、社はボロボロだった。そしてコンクリートで埋め立てられた鬼ヶ淵を見、ガ

ラスの割れた分校舎に入り、最後に自分の家を訪れた。

家の中は誇りが溜まり、誰も住んでないことがうかがえた。この時ケイは違和感を覚えた。家具がそのまま残っていた。もし村を捨てて引越したのなら家具は残っていないはずだからだ。まるである日家の住人が居なくなり、そのまま年月が過ぎたようだった。

ケイは自分の部屋に入った。そこは誰も訪れることが無いまま20年以上の月日が経った自分の部屋だった。ケイは机から部活メンバーと一緒に撮った写真を取り出し、両親の部屋から両親と一緒に撮った写真（最後に取った写真は小学生の時のものだった）を取り、懐に入れてから家を出た。

そしてもう一度古手神社を訪れ、そこから村を見渡した。そして飛行魔法で上空に上がり、村を見下ろして雛見沢を出た。

雛見沢を出たケイはその足で興宮を訪れた。そして図書館で昭和58年の雛見沢で何が起きたのか調べた。そして知ってしまった、古手梨花の死と雛見沢の全滅を。結局誰も助からなかった。誰も守ることも出来ずに自分は死に、両親もその次の日に亡くなった。

ケイは人目も気にせずに図書館で泣いた。

『主よ、大丈夫ですか？』

「ああ、大丈夫だ」

自分の事を心配する槍型のデバイス（相棒）、クリムゾン・フレ
イムにそう答えケイは空を見上げた。

「本当はもう少しここに居るつもりだったけど、帰ることにした」

『分かりました、転送魔法の準備をします』

仲間も両親もいない地球は、ケイにとって用の無いものだった。

『主よ』

「準備ができたのか？」

『いえ、かなり遠い場所ですが、強力な魔力反応があります』

「この世界には魔術師は居ないはず」

『どうされますか？』

相棒の問いかけに少し考え、ケイは反応のあった場所に向かうこ
とにした。

「行ってみよう、もし次元犯罪者やロストロギアだった場合管理局に知らせないといけないし、次元漂流者だったら助けないといけない」

『分かりました』

こうしてケイは反応があった場所、海鳴市に向かうことになった。そこで何が待っているのかも知らずに……。

「この辺りのはずなんだが……」

海鳴市に向かう途中、念話で助けを求める声を聞いたものの、それらしき人物を見つけることが出来なかった。

『主よ、近くに魔力反応！生物の物ではありません』

「ロストロギアか！」

そこには魔力の塊のようなものが存在していた。

『思念体です。それもかなり弱っています』

「どうすればいい？」

『封印魔法を』

「管理局に入るなら覚えた方がいいと言われて、覚えていたものが役に立ったな」

そう言っ てクリムゾン・フレイムを思念体に突き立て、ケイは封印魔法を発動させた。

『シリアル????封印完了』

ケイは知らなかったが、ユーノの魔法によって弱っていた思念体はあっさりと封印された。

「シリアル21?と言うことは他にもあるのか?」

封印され、青い宝石に戻ったジュエルシードを見ながらケイは思案した。

『いかなされますか？』

「近くに助けを呼んだ魔術師が居るはずだ、探して事情を聞こう」

しかしケイはユーノを見つけることが出来なかった。代わりにジュエルシードをもう一つ見つけるだけでその日は終わった。

「これは最低でも21個あると考えた方がいいのか？」

『主よ、この世界から管理局に連絡する方法を、我々は持ち合わせておりません。いかがいたしますか？』

「まずはこいつを探しながら助けを呼んだ魔術師を探す。管理局に知らせるためにこの世界から離れて、被害が出たら不味いからな」

『分かりました』

あと少しケイが来るのが早いかなユーノが持ちこたえていれば……。あるいはユーノは小動物に変身してケイが見落とさなければ、この日二人は出会うことができた。ケイ・グランガイツとユーノ・スクライア。この二人のすれ違いは一人の少女の運命を大きく帰ることになる……

現在のジュエルシード 2個 残り19個

Episode ?

助けを呼ぶ声に導かれ、少女は一匹のフェレットと出会った。それが少女と魔法の出会いと始まりだった。

魔法少女リリカルなのは、始まります。

フェレットの姿で病院に運ばれたユーノは、誰かがジュエルシードを封印したことを感じていた。たとえ優秀な魔術師であっても、まだ9歳の子供であるユーノは自分の助けを呼ぶ声に答えて近くの魔術師が来てくれたと思った。だから今は魔力の回復に専念することにした。

「ねえ、子のこの名前は何にしようか？」

「うーん、すずかちゃんは何か無い？」

「うーん、なににしような？」

病院から自分を受け取った三人は公園のベンチに座りながら自分の名前を考えている。幸い怪我は魔法で直したので何時でも動くことが出来る。本当なら事情を話して魔力が回復するまでの間お世話になるつもりだった。でも魔術師が来ているのならそちらと合流したほうがいい。合流した魔術師に自分の飼い主だと言ってもらって少女達とは別れた方がいい。ユーノはそう考えて魔力を蓄えていた。

ジュエルシードは人や生き物の思いや願いに反応して力を発揮する。その子犬には苦手な子がいた。その大好きな飼い主と散歩に行くと、ときどきある少女に出会う。自分が吼えたと相手も威嚇してくる。だから子犬は力が欲しかった。少女よりも大きくなって、強くなって少女を見返す力が欲しかった。その願いにジュエルシードは反応した。

ジュエルシードの発動にユーノは気づいた。そして少女達の手から逃れ、ジュエルシードの発動場所へ走り出した。責任感が強いユーノはこの時ジュエルシードのことしか考えていなかった。突然逃げ出せば少女達が追いかけてくる。そんなことも思い浮かばないほどユーノは焦っていた。

そして別の場所では……。

『主よ、また強力な魔力反応です』

「街中では飛んではいけないか。走るぞ！」

役者が揃い出していた。

ジュエルシードの発動場所である神社の境内に最初に着いたのはユーノだった。見ると女の人が倒れていて、四つ目の巨大な犬がそこに立っていた。現地生物を取り込んでジュエルシードが発動したことを、この時ユーノは悟った。

今の自分の力では封印できない。そう判断したユーノは念話で助けを呼ぶことにした。だが……

「もお、どこに行ったのよ！」

「アリサちゃん、みつかった？」

「二人とも待ってよ」

自分を助けてくれた少女達が追いかけてきた。

「な、なによ！これ！」

「え、犬の怪物？」

「あ、フェレット君がいた」

ユーノは自分の失敗を理解した。いきなり走り出せば追いかけてくることは分かっていたのに……。そんなことも思いつかなかった自分の短慮に後悔した。

「ねえ、あの犬アリサちゃんの事を見ていない？」

「え？」

もともとアリサを見返すために力を欲していた子犬は、暴走した状態でもしっかりとアリサの事を認識していた。

「グルルル、ウラオン！」

アリサ目掛けて突進してくる暴走犬から3人を守るために、ユーノはバリアをはった。

「え、一体どうしたの」

「ごめんなさい、あなた達を巻き込んでしまいました」

「うそ！フェレットがしゃべった」

「そのあなた力を貸してください。お礼は後で必ずします」

「え、私？」

「これを受け取ってください」

そう言ってユーノは首にかけていたデバイス、レイジングハートを少女、高町なのはに渡した。

「え、え、え？」

「起動パスワードを、僕に続いて言ってください」

「え、でも……」

「お願いします、もう長くは持ちそうにありません」

「なのは」

「なのはちゃん」

「わかった」

状況がよく分からないまま、なのははユーノの言うことを聞くことにした

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約のもと、その力を解き放て」

「契約のもと、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に」

「風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に」

「この手に魔法を。レイジングハート、セットアップ！」

『stand by ready・set up』

強力な魔力の奔流の中、こうして一人の魔法少女が誕生した。

「なのは」

「すごい」

「え、何？この格好」

本人の自覚は薄かったが。

「アフォーン！」

一度はなのはの魔力によって吹き飛ばされた暴走犬だったが、体制を建て直し再びアリサ目掛けて突進してきた。

「え、きゃあ！」

『p r o t e c t i o n』

とつさに身構えたなのはに呼応してレイジングハートはバリアを展開した。しかし今のなのはにとってはそれが限界だった。暴走犬の連続攻撃に対してアリサとすずかを守りながらでは、防御することしか出来なかった。

（お願いします。一昨日ジュエルシードを封印した魔術師の方、助けてください）

ユーノは念話で助けを求めた。そして……

「うをおおお！ここか！」

雄たけびと共に一人の少年が駆け上がってきた。

「クリムゾン・フレイム、セットアップウウ！」

『了解！』

その掛け声と共に少年、ケイは赤い鎧と身にまとい、銀色の槍で暴走犬を弾き飛ばした。

「すごい、一撃で弾き飛ばした」

『主よ、どうやら現地生物を取り込んでいるようです。前回よりも強力な力を感じられます』

「AAランクの魔力じゃ封印は難しいか。カートリッジを使っぞ」

『了解』

主の指示に従いクリムゾン・フレイムはカートリッジを一発装てんした。

「グオオオオ！」

叫びながら突進してくる暴走犬に対しケイは

「遅い！」

なのは達には見えない速さで槍を繰り出し暴走犬に突き立てた。

「封印！」

『シリアル？？封印します』

そして封印魔法が発動し、後には元に戻った子犬とジュエルシードが残された。

目を覚ました飼い主が子犬と帰るのを見届けてから、4人と一匹（？）は話を始めた。

「まずは自己紹介からかな。俺の名前は……前原圭一。11歳魔法使いだ。こいつは相棒のクリームゾン・フレイムだ」

『よろしく願います。お嬢様方』

「私は高町なのはといいます。私立聖祥大学付属小学校の3年1組、9歳です」

「え？」

「どうかしましたか？」

「いや、何でもない……」

なのはの自己紹介を聞いて一瞬驚いたケイだったが、そのまま自己紹介は続いた。

「私はアリサ・バニングスよ。なのはの友達でクラスメイトよ」

「おなじく月村すずかです。よろしく願います」

「僕の名前はユーノ・スクライアですよろしくお願いします」

「……フレットがしゃべった!」「」

「一体どうゆう関係なんだ？」

ケイの質問に対してなのは達はユーノとの出会いを話した。

「なるほど、それで巻き込まれてしまったと」

「ごめんなさい、僕のせいで……」

うな垂れるユーノに対しケイは

「それでユーノ、何がどうなっているのか説明してくれ」

状況の説明を求めた。

「……つまり自分が見つけた21個のジュエルシードが、運送中に事故でここ海鳴市にばら撒かれてしまったと」

「はい」

「それで責任をとって一人でジュエルシードを回収しに来たものの力尽きて倒れてしまったと」

「……」

「回収できたのは俺が集めたのを含めて、まだ4個だけだ」と

「うつ、ごめなさい」

「そんな、ユーノくんは悪くなんか無いよ」

罪悪感でさらにうな垂れるユーノとかばうなのは、そしてケイは

……

「そうか、大変だったんだな」

このときユーノは知らなかったが、ユーノのことを使い魔だと思
い込んでいたケイの中では、ご主人様とジュエルシード発掘↓事故
でご主人様死亡↓ジュエルシードがばら撒かれる↓形見のデバイス
（レイジングハート）を持って地球に↓魔力が尽きてダウンという
構図が出来ていた。

使い魔に関して基本的な知識しか持ち合わせていなかったために
起きた不幸な勘違いだった。

「それで、私達に出来ることはない？」

ユーノの説明を聞いてアリサが何か出来ることはないかと聞いて
きた。

「いえ、こうしてケイさんと合流できましたし、後は僕たちで何と
かします。助けていただいてありがとうございます」

これ以上なのは達を巻き込みたくないユーノ対して、

「悪いけど二つほどお願いしたいことがあるんだが」

ケイはなのはに助けを求めた。

「ちょっと圭一さん、何を言っているんですか！」

「まずは一つ目、3人のうちの誰でもいいからユーノのことを預かってはくれないか」

このお願いにケイと行動を共にするつもりユーノは驚いた。

「ケイさん、どうしてですか！」

「いいか良く聞いてくれ」

「はい」

真面目な顔で理由を話すケイに対して息をのむ3人と一匹。

「俺が泊まっているホテルはペット禁止なんだ」

「だあ……」

意外な答えにずっとこける一同だった。

「そしてもう一つはなのはちゃんにお願いしたい」

「え、何ですか？」

「ちょっと、何でなのはだけなのよ！」

なのはだけにお問い合わせをするケイに文句をいうアリサを無視して、ケイはカートリッジを取り出した。

「これに魔力を込めて欲しいんだ」

「これは？」

「それはカートリッジ！やっぱりケイさんはベルカ式の魔法使いなんです」

「何なのよそのベルカ式って」

「魔法の体系の一つです。僕が使っているのはミッド式、ケイさんのはベルカ式。魔力を使うところは同じなんですけど、術式が違います」

「ヨーロッパとかの黒魔術と日本の陰陽術の違いみたいなものだ」

「ケイさん詳しいですね」

「それで、なんではのほだけに頼るのよ！」

話を戻してアリサが囁み付いてきた。

「残念ながら魔力を持っているのはなのはちゃんだけだからだ」

「私は魔法を使えないって言うの！」

「ああ、こればかりは才能の世界だ」

「分かったわよ、せっかく魔法が使えるかと思ったのに」

「それでなのはちゃん、協力してくれるか？」

「え、はい私でよければ」

なのははカートリッジに魔力を込めることに応じるのだった。

『ところで主よ』

「どうかしたのかクリムゾン」

『先ほどからこちらのお嬢様が私の事をずっと見てきて気になるの』

ですが』

見ればさすがクリムゾン・フレイムを凝視でていた。

「すずか、さっきから一言もしゃべらずに何をしているの」

「え、クリムゾンさんのことが気になって。中はどうなっているの
かなって」

「……」

沈黙のこもった周囲の視線に対して

「え、べつにバラして中を見てみたいとか、そういうことを考えて
いるわけではないよ」

すずかの言い訳めいためいた発言に対しクリムゾン・フレイムを
懷にしまうと、

「じゃあ、もうすぐ暗くなるし今日の所はこの辺で」

ケイはなのは達と別れることにした。

3人がユーノを連れて帰って行くのを見送ると、クリムゾン・フレイムがケイに話しかけてきた。

『主よ『前原圭一』とは何なのですか？』

「もう分かっているだろ。俺はこの世界の出身だ。『前原圭一』はこの世界に俺がいた時の名前だ」

『それで名乗られたのですか』

「ミッドチルダの魔術師としてではなく、この世界の人間としての事件を解決したい。唯それだけだ」

『分かりました。ではもうひとつ、高町なのはに何か思い入れがあるのですか？』

「どうしてそう思う」

『最初に彼女が自己紹介をした時から主の様子が変でした。それに普通はこの世界の住人を魔法に、特にロストログアには関わらせないはず。なのに何故接点を持つとしたのですか。ユーノ・スクライアにしてもホテルに対して誤魔化しようはあつたはずですよ』

「似ていたんだよ」

二つ目の問いにそう答えて、ケイ……前原圭一は神社を後にした。

現在のジュエルシード 4個

残り17個

E p i s o d e ?

「ジュエルシード封印」

『シリアル???封印』

なのは達が通う学校の校庭で、圭一はジュエルシードを封印した。

「これで8個目」

『順調に集まって来ていますね』

「じゃあ帰るか」

『分かりました。大人モード使用します』

そう言ってクリムゾン・フレイムは魔方阵を展開し、圭一は20歳くらいの大人の姿になった。

「ふう」

『大丈夫ですか？大人モードに広域探索、さらにはジュエルシードの封印。だいぶ疲れが溜まっているようですが……』

「しかたがないさ。11歳の子供がホテルに泊まるのは面倒だし、平日の昼間や夜遅くに動き回するにはこの姿の方がいい」

『ですが……』

「幸い明日は日曜日だ。子供の姿で動き回れるから少しは楽が出来る」

『……』

そんな圭一のつぶやきに、明日は何としても休ませようと誓った主思いのデバイスだった。

そして日曜日。なのはからユーノを預かり、ジュエルシードを探すために歩いていると、圭一と同じくらいの年齢の子供達がサッカーをしているのを見かけた。

「あれはこの世界のスポーツ？」

「ああ、サッカーといって足でボールを蹴って相手のゴールにボールを入れるんだ」

「へえ、そうなんだ」

ユーノとサッカーについて話していると、圭一にとって懐かしい声が聞こえた

「みんなー、がんばれー！」

「梨花ちゃん！？」

「圭一？」

声のした方を見ると、そこにはなのはがいた

「何をやっているんだ、俺は……」

「圭一、どうかしたの？」

「いや、なんでもない」

そう言って圭一達はこの場を立ち去った。その為近くにジュエルシールドがあることにこの時圭一は気づかなかった。

「じゃあまたね、アリサちゃん、すずかちゃん」

サッカーの応援が終わりアリサ、すずかと別れたのはは、朝圭
一から預かったカートリッジを取り出した。

「じゃあ魔力を込めようか」

『Yes , master』

「終わったら圭一くんにこれを渡して、今日の練習をしよう」

魔法と出会ってからなのははユーノやレイジングハートの指導の
下、魔法の練習をしていた。そしてカートリッジに魔力を込めた後
念話でユーノに呼びかけた。

（ユーノくん聞こえる？）

（どうしたのなの？）

（カートリッジに魔力を込めたから圭一くんに渡したいんだけど）

（じゃあ、公園に来て。今そこにいるから）

ユーノの案内の元、なのはは公園に向かった。

（公園に着いたよ。今どこにいるの？）

（一番大きな木の下だよ。でも静かにして欲しいんだ）

（どうかしたの？）

（今、圭一が寝ているんだ）

ユーノの言われたとおり、木の下に来て見ると、たしかに圭一は寝ていた。

「今まで無理してがんばってきたから疲れが溜まっていたんだ。だから休ましたんだ」

「圭一くん一人でがんばってきたんだね」

そういうとなのはは静かに圭一の隣に腰を下ろした。

「ねえ、わたしじゃ圭一くんの助けにならないのかな？ 私いっぱい魔法の練習をしたよ」

「気持ちはいがたいけど、これは僕達の世界の住人が解決しないといけない問題なんだ。この世界の住人であるなのはに危ないこと

はさせられないよ。今こうして手伝ってくれてるだけでも十分圭一の役にたっているよ」

「でも……」

「今は静かに圭一を休ませてあげよう」

「そうだね」

そしてなのはも目を閉じようとしたとき、

「うーん、梨花ちゃん……」

圭一がそう呟いたのをなのはは聞いた。

「梨花ちゃん？」

「そう言えば、さっきもそんな名前を言っていたような」

「ねえ、クリムゾンさんは何か知らない？」

『私も詳しくは知りません。ただ亡くなられた主の友人だと……』

「あ……」

クリムゾン・フレイムの話聞いて後悔したのはだった。そして

「うん……」

圭一が目を覚ました

「ごめんなさい。起こしちゃった？」

「いや、いいよ。」

隣に座っているなのはに驚かずに圭一は答えた。

「それで、何かあったのか？」

「うん、今朝預かったカートリッジ、魔力を込めたから持って来たの」

「もうか、わざわざありがとうな」

「それとちょっと気になることがあって……」

なのはは圭一に父がオーナーを勤める翠屋JFCのメンバーの一人が、ジュエルシードを持っているかもしれないことを話した。

「気になるな。そいつはどこに行ったんだ？」

大雑把な方角と顔が分ければ、近くにいた人間を探すのは圭一にとって簡単だった。そして今まさに少年と少女を中心に、ジュエルシールドが発動しようとしていることを圭一は理解した。

「まずい、クリムゾン！結界を！」

『分かりました！』

圭一が結界を張るのと巨大植物が現れたのはほぼ同時だった。

「なんとか間に合ったか」

「なに、これ」

なのはの目には色が変わった世界と巨大な植物が写っていた。

「結界を張ったんだ。これで現実には被害は出ない」

「圭一も結界がはれたんだ」

「まさか、ユーノ。お前もはれたのか？」

「はい、結界は僕の得意な魔法の一つです」

「今度から、ユーノに頼むことにする……」

圭一がそういうと同時にクリムゾン・フレイムはカードリッジを一発リロードした。

「圭一くん？」

「俺は結界を張ることが出来るけど、あまり得意じゃない。一度結界を張ったら動けないし、維持するためにカートリッジを使わないといけない」

「それじゃあ！」

「すまないユーノ。封印はお前がやってくれ」

「僕が結界を張りなおしますので、圭一が封印してください！」

「悪い、もう封印するだけの魔力が残っていないんだ」

「そんな……」

打つ手が無い二人になのはが話しかけた。

「じゃあ、私が封印します」

「え？」

「レイジングハート、セットアップ」

『stand by ready・set up』

そしてなのはは起動パスワード無しでレイジングハートを起動させた。

「んな、いつの間に……」

そしてなのはは呪文を唱えた。

「まずはジュエルシードの詳しい場所を探さなきゃ。リリカルマジカル 探して、災厄の根源を」

『Area Search』

なのはの唱えた呪文に対し、魔法少女っぽくて可愛いなと圭一が思ったのもつかの間。

「見つけた！レイジングハート封印砲いくよ！」

『Shooting Mode』

「え？」

なのははレイジングハートを変形させ、いかにも砲撃を撃ちますという形に変形させると、封印砲をぶつ放した。

「いつけー！！！！」

そして圭一はもの凄い魔力の本流がジュエルシード目掛けて放たれるのを目の前で見た。

「なあ、ユーノ。一体なのはちゃんに何を教えたんだ……」

「僕じゃありません！教えたのはレイジングハートです！」

「そうか……」

ジュエルシードを回収し、少年を少女を公園のベンチに座らせるとなのはは圭一に笑いかけた。

「見てのとおり私も役に立ってます。だからジュエルシードを探すのを手伝わせてください」

後に圭一はこう語った。あの時いいえと言え、間違はなく魔砲をぶつ放される気がしたと。

現在のジュエルシード 9個 残り12個

E p i s o d e ?

巨大植物の一件から1週間が過ぎた。圭一は魔力の回復の為に数日休み、その後もジュエルシードを探しながらなのはの魔法の上手な使い方を教えていた。

「今日はなのはちゃんは友達の家にお呼ばれしているんだっとな」

『はい、最初になのは嬢に会った時に一緒にいた、さすが嬢の家のお茶会に誘われています』

「なのはちゃんの魔法の出来はどう思う？」

『まだ未熟な所もありますが、使い魔ユーノのサポートがあれば大丈夫かと』

「そうだな、やっぱり今日で最後に……ん？」

『ジュエルシードが発動したようです』

時は少し戻り、なのははアリサ達とお茶を飲んでいた。

「それで、調子はどうなのよ？」

なのは圭一達の手伝いをする事になった後、すぐにそのことをアリサとすずかに教えていた。そして今日はゆっくりとそのことについて話す事になっていた。

「うーん、あの後ジュエルシールドは一個も見つかっていないから、魔法の練習ばかりだよ」

「練習ってどんな事をしているの？」

「うん、イメージトレーニングって言うのかな？ 仮想空間で魔砲を撃つの。後圭一くんが組み手の相手をしながら効率的な魔法の使い方を教わっているんだ」

「魔法は教わっていないの？」

「圭一くんはベルカ式の魔法の使い手で、私のレイジングハートはミッド式のデバイスだから教えることが出来ないんだって」

「駄目な先生ね」

「でも魔法の上手な使い方って凄く大切だよ。魔法ってただ呪文を唱えればいいって言うわけじゃないの」

「そんなもんなの？」

「あと、体を鍛えているの」

「え、それ魔法と関係あるの？」

「魔法使いに体力は必要だって。勇者と一緒に旅をする魔法使いはHPが無くて防御力が無くても、勇者と一緒に世界を歩き回る体力はあるって」

「なんか分かりやすいような、分かりにくいような例えね」

「それで圭一とはどうなの？」

「どうって？」

「だって魔法少女とそれを助けるヒーローなんでしょ。だからその……」

「アリサちゃん、それはアニメの中だけだよ」

「うん、圭一くんとは友達だよ。それにどっちかかって言うと、勇者と魔法使いな関係だし」

そんな話をしていた。そしてなのはがジュエルシード集めに協力することになってからは、なのはのサポートをする事になった為になのはに付いて月村家に来ていたユーノは……。

「ユーノちゃん、いい子ですね」

「キュウ」

月村家のメイドのファリンに可愛がられていた。

その子猫はすずかが大好きだった。すずかは子猫が大きくなるのを喜んでいた。だから子猫は大きくなりたかった。その願いにジュエルシードは反応した。

「あ……」

「どうかしたの？」

「ジュエルシードが発動した」

「え、どこどこ？」

なのははジュエルシードが月村家の庭で発動したのを感知した。

「ちょっと行ってくるね」

「あ、なのは！」

ジュエルシードに気を取られ庭に向かって走り出したなのは、アリサが寂しそうな顔をしたことに気づかなかった。そして後にこれが二人に悲劇をもたらすことになる。

（なのは！）

（ユーノくん！）

ユーノからの念話がなのはに来た

（今から結界を張るよ）

（分かった）

（僕もすぐに行くし圭一もこっちに向かっているはずだから一人で無理はしないでね）

（うん！）

ユーノが結界を張るのを確認してなのははレイジングハートを起動させ、バリアジャケットを展開した。そしてなのはの目の前に強大な子猫が現れた。

（ユーノくん、ものすごく大きな猫がいるよ）

（うん、ここからでも見えるよ）

（どうしたんだろう？）

（たぶん、大きくなりたいという猫の願いが正しく叶えられたんだと思う）

（これからどうしようか？）

（とりあえずジュエルシードの封印を）

ユーノにそう言われ、なのははジュエルシードの封印をしようとした。その時黄色い雷が走った。

「魔力光……」

そこに一人の少女が立っていた。

「バルディッシュ……」

『Yes sir.』

高町なのはとフェイト・テッサロッサ。後に無二の親友となる二

人の出会いだった。

子猫を攻撃しジュエルシードを手に入れようとするフェイトと子猫を守ろうとするなのは戦いは、なのは防戦一方だった。しかしフェイトはなのはを攻め切れないでいた。

圭一がまず最初になのはに教えたのは防御の仕方だった。最初に二人が出会った時、なのはは暴走犬の攻撃を防ぐのに手一杯で何も出来なかった。だから上手な防御の仕方をまず圭一はなのはに教えた。それがなのはを助けていた。守りに徹することにより圧倒的に技量が上のフェイトの攻撃をなのは凌いでいた。

「ねえ、どうしてこんなことをするの？」

「……」

「わたしはなのは。高町なのは。ねえあなたの名前を教えてよ」

「フェイト。フェイト・テッサロッサ」

「フェイトちゃん。何で私達戦っているの？ジュエルシードが欲しいの？ねえ、教えてよ」

「教えてたところで何も変わらない」

会話をしながらの戦いは膠着状態になっていた。しかしそれも長

くは続かなかった。

「なのは！」

「ユーノくん！」

まずはユーノは到着し、

「フェイトの邪魔をするな！」

次にフェイトの使い魔のアルフが乱入して来た。

「なのは！危ない！」

そしてフェイトの攻撃を防ぐために動きを止めたなのはに対しアルフが殴りかかってきた。多対1の経験が無いなのはは反応が間に合わなかったが、

「遅い、そして軽い！」

圭一が現れ、割って入ってそれを防いだ。

「な、私の拳を片手で受け止めただと……」

「ユーノ！こいつは任せた！」

そう言って圭一はアルフをユーノのいる方に投げ飛ばした。

「分かった！任せて」

そしてフェイトのほうを向き、

「なのは！この子の相手は俺がするからジュエルシードの封印を！」

「はい、分かりました！」

「させない！」

子猫に向かうなのはを止めようとするフェイトの対し、

「おっと、そうは行かないぜ」

圭一が立ちふさがった。

圭一たフェイトの戦いは接近戦の応酬だった。クリムゾン・フレイムを見て圭一が接近戦型だと判断したフェイトは中距離戦で戦おうとした。速さではフェイトは圭一に勝っていた。しかし中距離魔法を放つ前に圭一に接近され、うまく攻撃が出来なかった。そして自分の方が早いと分かると接近戦に切り替えた。

フェイトのにとって圭一は不気味な相手だった。魔力も早さも自分が上なのに相手は自分と互角以上に戦っている。なのはのように守りに徹しているのならとにかく、相手は自分以上に攻撃をしてくるからだった。

圭一にとってフェイトはやりやすい相手だった。魔力も早さも自分より上で技量もある。しかし動きが精錬されすぎていて先を読むのは簡単だった。部活メンバーのような意外な一手を打たない素直なフェイトは、圭一にとってカモだった。

そしてなのはがジュエルシードを封印し、その事に気を取られた隙を付いて圭一はフェイトのバルディッシュをはじき飛ばした。

「しまっ！」

「もらった！」

そしてフェイトに飛びつき地面に押さえつけた。

「フエイト！」

「今だ！バインド！」

そしてフエイトが捕まったことに気を取られたアルフもまた、ユニのバインドの捕らわれた。

魔道士は魔力で身体能力を強化できる。しかしスピード重視のフエイトはパワータイプの圭一に力では勝てず動けないでいた。

「く、放して」

「落ち着け、少し話をしよう」

放したらずまず逃げると分かっていたので、圭一はフエイトを放せないでいた。

そんな中魔方陣が展開し、一人の女性が転移してきた。

「私の娘を放していただけにかしら」

「お母さん……」

「始めまして、私はその子の母親のプレシア・テッサロッサよ」

そしてプレシアは事情を説明した。自分がミッドチルダの喧騒に嫌気が差し、娘を連れて次元の狭間で静かに暮らしていること。危険なロストログアがばら撒かれたのを感じて娘のフェイトに回収を命じたこと。そして自分がジュエルシードを必要と勘違いしたフェイトが、圭一達とぶつかり合ってしまったことを謝罪した。

「本当にごめんなさい。それでもし許してくれるならこの子にも手伝わせて欲しいのだけでも」

「俺は別にいいと思うけど、二人はどう思う？」

「喜んでお願いします」

「これからは争わなくてもいいんだね、よかった。フェイトちゃん、これからよろしくね」

「勘違いで襲ってごめんなさい。これからよろしくお願いします」

こうしてなのはに続きフェイトとアルフが仲間になった。

「ところでお願いしたい事があるんですが……」

落ち着いたところで圭一はプレシアの方を向き話しかけた。

「何かしら？」

圭一は真剣な顔をしていた。きっと重要な話だろうと息をのむ一同。

「滞在費が無くなりそうなので、お金を貸してください」

そういつて圭一は頭を下げた。

「だあ」

圭一の発言に崩れ落ちるのはとユーノ。そしてテッサロッサ家の面々は目を点にしていた。

もともと圭一は地球には1週間位の滞在の予定だった。お土産を買ったために多めにお金を持っでは来たが、それでも切り詰めて2週間が限界で、そろそろ地球のお金が無くなりそうだったのだ。

その為一旦なのはとユーノの二人に海鳴市を任せて、一度ミッドチルダに戻るつもりだった。このとき圭一はユーノが管理局に通報していないことを知らなかった。てっきりユーノが管理局に通報していたものと思い込んでいた。

そして自分の性格を知っている師匠が事件の事を知って、事件解

決の為に自分が地球でがんばっていると考えているから、帰りが遅くても何も言ってこないと思っていた。もつともこれは圭一の勘違いでミッドチルダに戻ってから本当の理由を知って圭一は啞然とすることになる。

その後の話し合いで圭一はプレシアが地球に用意したマンションでフェイトと暮らすことになった。転送魔法で帰って行くプレシアと、フェイトに案内されてマンションに向かう圭一達と分かれて、なのはが月村家に戻ると……

「うわぁーん！ユーノくんどこに行ったの？」

「落ち着いて、大丈夫だから」

「そうよ、きつとなのはと一緒だから」

泣きながらユーノを探すファリンとそれをなだめるアリサとすずかがいた。

「まったく、使えない人形ね」

自らの本拠地である時の庭園にもどると悪態をついた。ジュエルシードの事を知り手に入れようとしたものの、自分が手を下す前に航行船が事故に合いジュエルシードは地球に散ってしまった。なんとかジュエルシードの行き先を調べたものの、すでに他の魔道士がジュエルシードの回収を行っていた。

目的の達成のためには相手を排除して、ジュエルシードを奪わないといけない。フェイトの能力を疑うつもりは無いが、相手の能力を甘く見るつもりは無かった。金が目的ならいくらでも出すつもりだったし、利害が一致するならば共闘するつもりだった。

まずは相手の实力を知るためにフェイトに中途半端な情報を与え戦わせた。そしてフェイトは負けた。それも傷つけることも無く生け捕りで。自分が正面から戦えば、魔力が上でも勝つのは難しいとこの時プレシアは悟った。

そしてプレシアは自ら姿を現すという賭けに出て、そして賭けに勝った。私利私欲のためではなく、ただ自らの正義感でジュエルシードを集めていたお子様は自分の事を信用した。さらにもっとも強いベルカの騎士はこちらの手の内に入った。

短期間でジュエルシードの半分を集めた彼らを利用し、プレシアは目的を達成するつもりだった。

「待っていてねアリシア、もうすぐだから……」

病魔に体を蝕まれ、それでも凶器に彩られた瞳は輝いていた。

現在のジュエルシード 10個 残り11個

Episode ? (後書き)

書き溜め全部放出。ひぐらしの続きも書いていくので次の更新は空きます。

E p i s o d e ?

ジュエルシードの探索にフェイトが加わって1週間近くが立ち、圭一達はさらに3個のジュエルシードを見つけていた。

そんな中、圭一はユーノと一緒にフェイトのマンションでカップめんを食べていた。

「すまないな、ユーノ。本当は温泉に行きたかったんだろう」

週末の連休を利用して、なのはは家族や友達と一緒に温泉旅行に出かけていた。

「温泉には興味があつたけど、でも一緒に行くとなんだか後で酷い目にあいそうな気がするんだよね。だから留守番で良かった気がするよ」

小皿に取り分けられたラーメンを、小さな箸を使って器用に食べながらユーノは返事をした。

「残り8個のうち、6個はまず間違いなく海の中だ」

ずーずーと麺をすすりながら圭一は言った。

「そして残り2個のうちの1個は、フェイトが回収に向かった」

「まさかなのはが向かった温泉の近くに、ジュエルシードの反応があつたのには驚いたね」

「旅行中のなのはちゃんの邪魔をしたくないからな。それにフェイトにも温泉を楽しんで貰いたかつたし」

そう言つて圭一はラーメンの汁を飲み干した。

『圭よ』

「どうした。クリムゾン？」

『もう少し食事に気を使ってください。まるで妻と子供が遊びに出かけて、休日ペットと寂しく留守番をする旦那を見ているようで悲しくなります』

「……最後の一つを探しに行くか」

相棒の言葉を無視して、圭一はユーノと部屋を出た。

週末の連休を利用して、なのはは家族や友達と一緒に温泉に来ていた。旅館についた早々、なのはの両親である高町士郎と高町桃子は新婚夫婦のごとく散歩にでかけた。そして兄の高町恭也は、すずかの姉であり恋人である月村忍と部屋で熟年夫婦の如くくつろいでいた。ちなみに旅行にきたメンバーの中で逆だろうと突っ込みを入れるものはいなかった。

そしてなのははアリサとすずか、姉の高町美由紀、メイドのファリンと温泉に入ることにした。そこに先客がいることも知らずに。

「湯につかる前に体を洗うのがマナーらしいよ」

「そう、じゃあ体を洗わないと」

なのは達が浴場に入ると、金髪の綺麗な髪的美少女と美人のお姉さんがいた。

「フェイトちゃん！アルフさんも！」

「あ、なのは」

「おや、ようやくご到着かい？」

「な、なんでここにいるの？」

「ジュエルシードの反応があつたから回収しに来た」

「じゃあ、急いで探さないと！」

「もう見つけて回収した」

「もう回収した」

昨日の夜のうちに温泉に来ていたフェイトは、すでにジュエルシードを回収し終えていた。そして圭一の勧めによりアルフと温泉入るために旅館に来ていた。

「なのは、この子知り合いなの？」

フェイトと会話を始めたなのはに美由紀が質問をした。

「うん、お友達なの」

(ごめんね、お姉ちゃん魔法の事を知らないから、続きはまた後

で)

(分かった)

念話で事情を話したなのはフェイトを紹介した。

「この子はフェイトちゃん。私のお友達なの」

「フェイト・テッサロッサです」

「わたしはアルフだよ。この子の保護者みたいなものさ」

「フェイトちゃんか。私はなのはの姉の高町美由紀。よろしくね」

「アリサ・バニングスよ。あんたの事はなのはから聞いているわ」

「月村すずかです。よろしくねフェイトちゃん」

「あ、私はメイドのファリンです。よろしくお願いします」

自己紹介が終わった後、それぞれ温泉でくつろぐ事になった。

「フェイトちゃん、体を洗うんだったよね。洗いっこしようか」

「うん」

「あ、そうだ。フェイトはまだ自分の髪を洗えないから、ついでにお願いするよ」

「アルフ……」

アルフの発言に頬を赤らめるフェイトだった。

「じゃあいつもアルフさんが髪を洗っているんだ」

フェイトの綺麗な髪を見ながらなのは言った。

「うん。あ、でも最近は圭一が洗ってくれている」

圭一やなのはのことを詳しく知り、可能なら見方にしたいと思っていたプレシアは、フェイトに二人と仲良くしろと命令していた。そして日本には『裸の付き合い』があると知ったフェイトは圭一が風呂に入っている所に突入し、以後一緒に入るようになった。

後に圭一はこう語る。妹分二人で慣れていた為、まったく萌えなかった。でも水着でこられたらやばかったと。

「ふーん、そうなんだ」

「うん、妹で慣れているらしくて、髪を洗うのが上手なんだ」

「へー」

そして生まれてから男性との接触がまったくなかった為、羞恥心がまったく育たなかった金髪の少女と、今でも父親や兄と一緒に風呂に入っている妹の会話を近くで聞いていた少女二人は固まっていた。

温泉から出た二人はお土産コーナーに来ていた。

「フェイトちゃん、もう帰っちゃうんだ」

「うん、だから圭一にお土産を買っていこうと」

「そっか、圭一くんお留守番なものね」

「なのはは何かいいと思う?」

そんな二人の様子をアリサはじっと見つめていた。

「何よ、二人だけで楽しそうに会話して……」

「アリサちゃん……」

「そりゃあ、あの子は綺麗な髪と瞳で、お肌も染み一つないし可愛

いけどさ……」

「なんか、恋人を取られた女の子みたいなこと言ってるよ」

「な、変なこと言わないでよ」

このときアリサの中には嫉妬という小さな炎が燦っていた。そしてそれはジュエルシードという燃料を得て、激しく燃え上がることになる。けれども、その事を知る者は今はまだ誰もいなかった。

現在のジュエルシード 14個 残り7個

おまけ

日が沈んだ頃、フェイトはアルフと一緒にマンションに帰ってきた。先に時の庭園に行き、プレシアにお土産を渡し、話をしていたために遅くなったのだ。プレシアも圭一達に疑われるのを避けるために優しい母を演じ、フェイトに優しくしていた。

「ただいま」

「お帰り、温泉はどうだった？」

「うん、なのはと一緒だったし楽しかったよ」

「じゃあ晩御飯の用意は私がするからさ、二人は先にお風呂に入っ
てきなよ」

「うん、そうするね」

「せっかくだし、ユーノも一緒に入るか」

「え？」

「うん、行こう」

「え、え、え？ちょっと待って！」

数年後、このことを知ったフェイトちゃんファンクラブに、圭一
とユーノは命を狙われることになる。

そしてその頃ようやく羞恥心が芽生えたフェイトは、そのことを
思い出して悶絶したという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1102x/>

魔法少女リリカルなのは 騎士マジシャンK

2011年11月11日15時44分発行